

筑波大学における日本語教育その十年

堀 口 純 子

(筑波大学・文芸言語学系)

筑波大学は昭和48年10月1日に創設され、50年に初めて12名の外国人留学生を受け入れた。年を追って増え続けていくことが予想される国際関係業務に対応するため、52年4月1日研究協力部国際交流課が発足した。51年度までは主として個人レベルでの交流の域を出なかった留学生の受け入れが、52年度からは対応事務の整備によって組織化され、留学生は年々増加の一途をたどってきた。

50年に12名の留学生が来学し、現実には留学生が筑波大学で授業や研究指導を受け始めたことによって、日本語教育の必要性が急務となり、50年6月に文芸言語学系内に「外国人に対する日本語教育プロジェクト」が発足した。この1年間の準備、研究期間を経て、51年度から外国人留学生に対する日本語教育が始められ、今年でちょうど10年を経過したことになる。

この間の大きな出来事だけでも、53年の「国際化過程における日本語教育セミナー」⁽¹⁾の開催、54年の「第5回筑波国際シンポジウム」⁽²⁾の開催、修士課程地域研究研究科における日本語教師養成プログラムおよび博士課程文芸言語研究科における日本語教育研究者養成プログラムの開設、55年の教員研修プログラムの受け入れ、59年の留学生教育センターの設立、日本語予備教育生の受け入れ、日本語・日本文化学類の開設などがあげられる。一方日本語教育の現場では、留学生の多様化と増大化に対応すべく、半年ごとに何らかの改変を迫られながら現在に至っている。

0. 昭和50年度⁽³⁾

50年4月に初めて6名の留学生を受け入れ、2学期には12名に増えたが、この年はまだ、日本語科目は開設されていなかった。しかし、その必要性が急務となり、6月に文芸言語学系内に「外国人に対する日本語教育プロジェクト」が発足した。このプロジェクトでは、日本語教育関係の資料や文献の収集から始め、日本語教育の具体的及び理論的な問題についての討論、日本語教育映画の試写、E Jordan氏の講演会などにより、日本語科目開設

のための準備を進めていった。この1年間の成果は『外国人と日本語1』にまとめられている。

1. 昭和51年度

5月1日現在の留学生数は30名である。この年の4月から外国人留学生に対する日本語教育が始まった。筑波大学の最初の日本語科目は、大学院修士課程地域研究研究科に開設された全学大学院共通科目としての中級日本語3コマである。そのほかに日本語関係の科目では、地域研究研究科日本研究コースの専門科目としての「日本語の歴史」および「外国語としての日本語論」があった。

1学期は「外国人に対する日本語教育プロジェクト」のメンバーである日本語学および国語の教官4名が兼担し、2学期からは日本語担当教官として赴任した草薙裕が担当した。

(1) 51年度開設日本語科目

レベル	コマ数	対 象	所 属	開講時期
中級	3	全学大学院生／研究生	地域研究研究科	51.4-52.3

2. 昭和52年度

52年度は留学生が108名に増え、各自の日本語能力や日本語学習の目標が多様化してきた。この現実に対応するため、地域研究研究科の日本語科目を3コマから5コマに増やし、講読、作文、聴解、会話、文法の5科目に分けた。1科目1コマで、各科目ともレベルは中級である。これらは地域研究研究科の科目ではあるが、他の研究科の大学院生はもちろんのこと研究生にも聴講を認めていた。

52年7月に筑波大学とニューヨーク州立大学の間で交換留学生に関する大学間協定が締結され、9月にニューヨーク州立大学オスウェーゴ校から14名の交換留学生が人間学類の受け入れで来学した。これらの留学生に対する全く初歩からの日本語を3コマ開講するようとの要請が人間学類からあったが、専任教員1人ではとうてい対応しきれず、3コマのうち2コマは言語学専攻の大学院生を専任教員の指導のもとにドリル・マスターとして何とか切り抜けるという状態であった。

(2) 52年度開設日本語科目

レベル	コマ数	対 象	所 属	開講時期
初 級	3	NY州立大交換留学生	人 間 学 類	52.9-52.12
中 級	5	全学大学院生／研究生	地域研究研究科	52.4-53.3

3. 昭和53年度

53年度は留学生が123名になったが、大学院の正規生および研究生のための日本語科目は前年度と同じで、地域研究研究科に開設されている中級の講読、作文、聴解、会話、文法の5科目であった。5つの科目はそれぞれ独立していて、教材は各担当者が作成したものを使用した。

9月には前年同様ニューヨーク州立大学から11名が人間学類の受け入れで来学したが、これに加えて、カンサス大学からも7名の交換留学生が比較文化学類の受け入れで来学した。それぞれの受け入れ先から3コマずつ日本語科目開講の要請があり、この年の9月に赴任した堀口純子がこれらを担当した。前者は全くの初歩で“Communicating in Japanese”(Kusanagi,Y)を使用し、後者は初級後期で“Japanese for Today”(Gakken)をローマ字部分は漢字仮名交じりに書き直して使用した。

(3) 53年度開設日本語科目

レベル	コマ数	対 象	所 属	開講時期	教科書／教材
初 級	3	NY州立大交換留学生	人 間 学 類	53.9-53.12	Communicating in Japanese
初級後期	3	カンサス大交換留学生	比較文化学類	53.9-54.3	Japanese for Today
中 級	5	全学大学院生／研究生	地域研究研究科	53.4-54.3	

4. 昭和54年度

筑波大学で受け入れる外国人留学生は、原則として大学院の正規生ないしは研究科受け入れの研究生で、初級終了以上の日本語力のある者とされていたため、これらの留学生を対象とした日本語科目はこれまで中級しか開講されていなかった。しかし、54年度には留学生が153名に増え、各自の日本語能力や専攻分野などこれまでも見られた個人差が

ますます大きくなり、日本語学習の目的や目標も多様化してきた。そのため、全学の大学院生や研究生を対象とした日本語科目がこれまでの中級レベル5コマでは、質量ともに現実に対応できなくなっていた。そこで、この年の4月に赴任した寺村秀夫を中心に3人の日本語担当教員で日本語プログラム全体を見直し、新しく3つのコースを開設した。(4)に示すように便宜上A～Eとレベル順に名称を付けたが、この中でB、C、Eが54年度に新たに開設されたものである。

(4) 54年度開設日本語科目

名称	レベル	コマ数	対 象	所 属	開講時期	学生数	教科書/教材
A1	初 級	3	NY州立大交換留学生	人 間 学 類	54. 9-54.12	8	Communicating in Japanese
A2	初級後期	3	カンサス大交換留学生	比較文化学類	54. 9-55. 3	2	Japanese for Today
B	初中級	8	大阪外大終了生	課 外 補 講	54.10-55. 3	9	中級表現文型、新聞入門、人文社会系読解入門
C	中級前期	3	全学大学院生/研究生	地域研究研究科	54. 4-55. 3	28	Integrated Spoken Japanese I
D	中級後期	5	地域研究科院生			24	新聞、日本人の生活空間、Introduction to the Structure of Japanese 1,2など
E	上 級	4	地域研日本研究院生			20	日本の思想、日本語講座 I など

国費の研究留学生で日本語ができない者は、来日後6か月間大阪外国語大学で日本語の予備教育を受け、それから各大学に配属される。筑波大学にも毎年このような学生が10名余来るが、来学時の日本語力では地域研究研究科の中級コースに入るのも大学院の講義を受けるのもとても無理な状態であった。そこで、54年の10月に大阪外国語大学から来た学生を対象とした初中級の日本語科目を8コマ開講し、これをBコースとした。このころ市販されていた中級の教科書は初級とのギャップが大きく、また留学生を対象としたものは限られていた。そこでBコースは、文型の授業では表現文型を中心にした教材を、読解の授業では新聞および高校の社会科の教科書をもとにした教材を担当者が作って使用した。このコースは課外補講であるため、所属する教育組織がなく、急きょ教室は第2学群に、事務的なことは国際交流課をお願いした。

前年度までの中級5科目は内容は従来のままでコース名をDとし、このほかにそれよりレベルの低いCコースを3コマ、レベルの高いEコースを4コマ新しく地域研究研究科に

開講した。Cコースでは総合的な訓練をめざし、“Integrated Spoken Japanese I”(日本研究センター)を教科書として使った。Eコースは講読、会話、聴取、文法の4科目に分けられた。DコースとEコースは一つ一つの科目が独立しているため、教材は各担当者が指定したもの、または作成したものを使用した。Dコースでは、『日本人の生活空間』(梅棹忠夫)や、“An Introduction to the Structure of Japanese 1,2”(Teramura,H)を、Eコースでは、『日本の思想』(丸山真男)や『日本語講座I』(金田一春彦)を使用した。主な受講生は、Cコースが研究生および地域研究研究科以外の大学院生、Dコースが地域研究研究科の日本研究コース以外の学生、Eコースが地域研究研究科の日本研究コースの学生であった。

前年度より15コマ増えた上に、この年から修士課程地域研究研究科には日本語教師養成プログラムが、また博士課程文芸言語研究科には日本語教育研究者養成プログラムが設けられたため、専任教官だけではまかないきれなくなり、9月から3名の非常勤講師を頼んだ。非常勤講師はA1コースとA2コースとBコースを担当した。しかし、前にも述べた通りBコースは課外補講で所属する組織がないため、専任教官が教室や予算の確保のために奔走しなければならず、また非常勤講師までがテープや画用紙などの購入や教材のコピーなどに苦労しなければならないという状態であった。

5. 昭和55年度

55年5月1日現在の留学生数は190名で、前年度よりまた40名ほど増えたが、日本語担当のスタッフは前年と変わりなく専任3名、非常勤3名という陣容でスタートしなければならなかった。しかし、だからといって日本語プログラムも前年と同じというわけにはいかず、B/C共通科目3コマとD/E共通科目2コマを新たに追加した。これは各コースの授業の不足を補うための苦肉の策ではあったが、毎回受講生が異なり、また受講生の個人差が大きいため、焦点が定まらず、結局1学期で姿を消すこととなった。この失敗をもとに、2学期からは日本語プログラムを(5)のように修正した。

(5) 55年度開設日本語科目

名称	レベル	コマ数	対象	所属	学生数	開講時期	教科書／教材
A	初級	9	教員研修1期生	教育研究科	14	55.10-56.3	にはんごのきそ
B	初中級	7	大阪外大終了生	課外補講	13	55.4-55.10	中級表現文型、新聞入門、人文社会系統解入門
		7			14	55.10-56.3	
C	中級前期	9	研究生／全学大学院生	地域研究研究科	20	55.10-56.3	中級表現文型、新聞、人文社会系教養書
D	中級後期	5	全学大学院生／研究生		25	55.4-56.3	Integrated Spoken Japanese
E	上級前期	6	地域研究科院生		33		適応の条件、たべもの文明考、An Introduction to the Structure of Japanese 2,3など
F	上級後期	4	地域日本研究院生		27		日本の思想、談話の文法など

過去3年間続いたニューヨーク州立大学からの交換留學生がこの年はゼロで、またカンサス大学からの2名は中級程度の日本語力があつたため、前年度まで2学期に開講していた交換留學生のための初級の日本語科目を55年度は開講する必要がなくなった。

しかし、54年にマニラで開催された第5回国連貿易開発会議で故大平首相によって提唱されたアセアン諸国の現職教員の日本での研修が、55年10月に教員研修プログラムとして具体化し、筑波大学でも10名の研修留學生を受け入れた。研修期間は1年半であるが、この間の受け入れ先である教育研究科から最初の半年は日本語教育に重点をおきたいので10コマ開講してほしいとの要請があつた。受講生は現職教員なので、10コマのうち1コマは教育関係の教官による教育用語に関する授業とし、9コマを日本語の教官が担当した。本学で開講される日本語科目は原則として中級レベルなので、交換留學生のための特別の初級日本語3コマを除けば、9コマの初級日本語というのは初めての試みである。このコースはアセアンコースとして、便宜上Aコースと呼ぶことにした。これが他の日本語コースの中に位置付けられ、A～Fコースの一つとなった。これは教員研修プログラムの研修生10名のために開設されたコースであるが、他のコースではついていけない4名の研究生が聴講を許された。教科書は『にはんごのきそ』（海外技術者研修協会）を使用した。⁽⁴⁾

1学期の経験から、BコースではやさしすぎるがCコースではむずかしすぎるという学生がかなりいることが分かった。また、Bコースは6か月のコースでC～Eコースは1年間のコースであるため、9月にBを修了した学生の10月からの行き先がないという事態になってしまった。そこで、55年10月にBに続くレベルのコースを新たに設け、これをCコ

ースとした。そのため、54年4月から55年9月までC、D、Eと呼ばれてきた地域研究研究科の日本語コースの名称が一つずつずれてD、E、Fとなった。Cコースの新設によって、それまでレベルの合わない上のコースにいた学生を能力に合ったコースに移すことができ、それは結果的には地域研究研究科の日本語科目のレベルアップにもつながった。

Bコースでは前年度に作った教材を手直ししながら使い、Cコースでもそれと同じ形式で表現文型を中心に担当者が作った教材を使用した。Dコースは前年度と同じ“Integrated Spoken Japanese”で、EコースとFコースは読解、作文、聴解、会話、文法の各科目の担当者が指定したもの、または作成したものを使用した。Eコースでは、『適応の条件』（中根千枝）、『たべもの文明考』（大塚滋），“An Introduction to the Structure of Japanese 2.3”を、Fコースでは、『日本の思想』、『談話の文法』（久野 ）を使用した。

BとCは課外補講で所属する教育組織がないため、またもや教室の確保のためにあちこちとかけ合ったが、コマ数、学生数、時間帯などの条件を考慮すると1か所では無理で、この年は外国語センターと第二学群と地域研究研究科の3か所の教室を借りてやっと何とかおさまった。

4月には前年度と同じ専任教官3名、非常勤講師3名でスタートしたのであるが、10月にはこれだけでは対応しきれなくなり、新たに非常勤講師を1名頼み、そのほかに日本語教師養成プログラムの大学院生にラボとドリルを手伝ってもらった。

6. 昭和56年度

56年5月1日現在の留学生数は254名で、前年度よりさらに60名ほど増えたが、日本語担当のスタッフは前年度の後期と同じ専任3名、非常勤4名で、しかも日本語教師養成プログラムの大学院生の応援が期待できなくなったため、前年度と同じだけのコマ数の確保さえ難しい状態であった。結局前年度より全体で3コマ減らして、4月から10月を乗り切った。10月からは非常勤講師が5名になり、大体前年度と同程度に開講できるようになった。

(6) 56年度開設日本語科目

名称	レベル	コマ数	対象	所 属	学生数	開講時期	教科書／教材
A	初級1	8	教員研修2期生	教育研究科	9	56.10-57.3	にほんごのきそⅠ
B(ASEAN)	初級2	8	教員研修1期生		14	56.4-56.10	Japanese for Today, 中級表現文型
B	初中級	8	大阪外大終了生	課 外 補 講	20	56.4-56.10	中級表現文型, 新聞 入門, 人文社会系統
		8			22	56.10-57.3	
C	中級前期	9	研究生/全学院生		26	56.4-56.10	中級表現文型, 新聞, 人文社会系教養書
		9			28	56.10-57.3	
D	中級後期	5	全学院生/研究生	地域研究研究科	49	56.4-57.3	Integrated Spoken Japanese
E	上級前期	4	地域研究科院生		40		「甘え」の構造, An Introduction to the Structure of Japanese 1-3 など
F	上級後期	5	地域日本研究院生		39		日本の思想, 談話の 文法など

55年10月から始まった教員研修プログラムのための日本語教育は、2学期目（4月～10月）は5コマに減らすというのが受け入れ先の教育研究科の計画だったようだが、研修生たちの強い希望により56年の4月からも8コマ開講することになった。コース名はアセアンのBとした。教科書は“Japanese for Today”を部分的に使って『にほんごのきそⅠ』に含まれていない基本文型の補いをし、またそれと並行してB・Cコース用に作成中の中級表現文型の比較的やさしい課を使用した。これで教員研修プログラムの第1期生の日本語教育が修了した。

56年10月からは、教員研修プログラムの第2期生のための初級コースAが始まった。第2期生からは派遣国がアセアン諸国に限定されなくなったので、アセアンコースという名称はなくなった。このコースには正規の教員研修生7名のほかに2名の研究生が聴講を許された。教科書は『にほんごのきそⅠ』を使用した。これは、56年10月に海外技術者研修協会から『にほんごのきそⅡ』が出版されたため、それまでの『にほんごのきそⅠ』が『にほんごのきそⅠ』となったもので、内容的には第1期生のAコースで使用した『にほんごのきそⅠ』と同じである。

4月は前年度より3コマ減らしてスタートせざるを得ない状態だったが、10月は非常勤講師が1人増えて、大体前年度と同程度に開講することができた。しかし、留学生の総数が増えているのであるから、前年度と同じということは質的には低下しているわけである。実際、C～Fコースの学生数の増大と、それに伴う授業の効果の低下が深刻な問題となっ

できた。特にD～Fコースは本来大学院の外国語科目として地域研究研究科で開講している科目で、中でもEとFは対象を大学院の正規生にしぼっていたのであるが、そこに研究生がだんだん来るようになってきた。そのため、1クラスの人数の増大だけではなく、同じクラスに大学院の外国語の単位として履修している大学院生と、大学院の入学試験をめざしている研究生とがいることによって、受講生の目的、目標、興味、意欲などが非常に異なるという問題も起こってきた。教科書は大体前年度と同じであるが、Eコースの読解では、『適応の条件』『たべもの文明考』にかわって『「甘え」の構造』（土居健郎）を使用した。

教員研修生のための日本語コースは教育研究科に所属し、課外補講のBコースとCコースは所属する組織がないのだが、どのコースも主に非常勤講師が担当していたので、前年度のように広いキャンパスを歩き回らなくてもすむように、外国語センターに無理をお願いしてA～Cの教室を1か所にまとめることができた。

54年10月からBコース用に、55年10月からBコースとCコース用に担当者が作ってきたプリント教材が、57年3月に試作版の形で『日本語表現文型 中級Ⅰ』『日本語表現文型 中級Ⅱ』として印刷された。Ⅰは、1. 定義・分類・説明、2. 存在・位置、3. 存在・数量、4. 移動、5. 変化、6. 時の表現、7. 希望・願望、8. 申し出・勧め・誘い、9. 意志、10. 要求・依頼・命令、11. 過程・推移・経過、の11課からなり、Ⅱは、12. 逆接、13. 原因・理由Ⅰ、14. 原因・理由Ⅱ、15. 類似・比況・比論、16. 比較、17. 程度、18. 対比、19. 伝聞、20. 予想・予感・徴候、21. 予想の実現・非実現、の10課からなっている。上記の表現文型を中心として、それに会話と読解が組み合わさって一つの課ができています。

7. 昭和57年度

57年5月1日現在の留学生数は306名である。55年10月から非常勤講師として日本語科目を担当してきた佐久間まゆみが57年4月に専任になり、これで日本語担当の専任教官が4名になった。非常勤講師は1人が渡米し佐久間が専任になったため、前年度からの継続は3名になったが、本学の修士課程の地域研究研究科日本語教師養成プログラムを修了した2名を非常勤講師として迎えることができ、前年度同様5名になった。

(7) 57年度開設日本語科目

名称	レベル	コマ数	対象	所属	学生数	開講時期	教科書／教材
A(教員)	初級 1	9	教員研修 3 期生	教育研究科	10	57.10-58. 3	にほんごのきそⅠ
B(教員)	初級 2	8	教員研修 2 期生		9	57. 4-57.10	にほんごのきそⅡ
B	初中級	8	研究生／大学院生	課外補講	19	57. 4-57.10	日本語表現文型 中級Ⅰ(試作版)
		10			17	57.10-58. 3	
C	中級前期	10			29	57. 4-57.10	日本語表現文型 中級Ⅱ(試作版)
		10			31	57.10-58. 3	
D	中級後期	5	大学院生／研究生		46		作成教材
E	上級前期	4	地域研究科院生	地域研究研究科	25	57. 4-58. 3	日本語文法教本 4, ことばと社会など
F	上級後期	5	地域日本研究院生		25		日本語の文法, たべ もの と日本人など

教員研修プログラムのためには、4月から10月までは57年3月にAコースを修了した第2期生のためのBコース、10月から3月までは新しく来た第3期生のためのAコースを開講した。教員研修生にはタイ人が多いので、タイ語の綾部裕子講師に協力を依頼し、2コマ担当していただいた。Bコースは『にほんごのきそⅠ』の残りの21課から始め、『にほんごのきそⅡ』を50課まで完了した。これで教員研修プログラムの第2期生の日本語教育が修了した。Aコースは正規の教員研修生7名と聴講を許可された3名が受講生で、教科書は前年度と同じ『にほんごのきそⅠ』である。

理科系、芸術系、体育系などの大学院に合格はしたが日本語力が低いという留学生が年々増加し、そのような学生のための日本語教育が必要になってきた。そこで、これまで大阪外国語大学の終了生を対象としていたBコースを、だれでも受講できる初中級の日本語科目としてオープンにした。その結果、大学院生の受講者が多くなり、大学院の正規の授業や実験のためにBコースの全部の授業に出席することは不可能という学生が出てきた。このような学生が少しでも多く授業に出られるようにと考え、前期は8コマだったBコースを後期は10コマにした。教科書は57年3月に印刷された試作版の『日本語表現文型 中級Ⅰ』（筑波大学）を使用した。

Cコースの受講生はほとんどが文化系の大学院をめざしている研究生で、入学試験にも日本語が必要という学生が多いため、57年度から10コマに増やした。教科書は試作版の『日本語表現文型 中級Ⅱ』（筑波大学）を使用した。

Dコースもますます研究生が多くなり、教室のかたすみにいる正規の大学院生のことを教師がいつも頭においていないと、受験準備コースになりかねないという状態になってきた。教材は、試作版の『日本語表現文型 中級Ⅰ, Ⅱ』をもとにして新たに作り直したものを使用した。

EコースとFコースは、各科目の担当者が指定したもの、または作成したものを使用した。Eコースの講読では『ことばと社会』（鈴木孝夫）、文法では『日本語文法教本4』（寺村秀夫）、Fコースの講読では『たべものと日本人』（河野友美）、文法では『日本語の文法（上）（下）』（寺村秀夫）を教科書として使用した。

この年から新しくできた共同研究棟に教員研修プログラムのための部屋ができたため、教員研修プログラムの日本語の授業はここで行えるようになった。あいかわらず所属がなく、したがって自由に使える教室もないBコースとCコースはこの年は地域研究研究科の教室を借りた。

8. 昭和58年度

58年5月1日現在の留学生数は362名である。教官は、専任が4名で、非常勤講師が4月は5名で10月に6名になった。また、54年から準備を進め、57年に試作版の形で印刷して1年間中級の全クラスで使用しながら討議をくり返し、作り直しを重ねてきた結果が、『日本語表現文型 中級Ⅰ』『日本語表現文型 中級Ⅱ』（筑波大学日本語教育研究会）としてまとめ、58年4月に出版された。⁽⁵⁾

教員研修プログラムのためのBコースは、58年3月にAコースを修了した第3期生のた

(8) 58年度開設日本語科目

名称	レベル	コマ数	対象	所 属	学生数	開講時期	教科書／教材		
A(教員)	初級1	9	教員研修4期生	教育研究科	9	58.10-59.3	にはんごのきそⅠ		
B(教員)	初級2	9	教員研修3期生		10	58.4-58.10	にはんごのきそⅡ, 日本語表現文型中級Ⅰ		
B	初中級	10	研究生／大学院生	課外補講	15	58.4-58.10	日本語表現文型中級Ⅰ		
		10			20	58.10-59.3			
C	中級前期	10			32	58.4-58.10	日本語表現文型中級Ⅱ		
		10			35	58.10-59.3			
D	中級後期	6			大学院生／研究生		69		日本語表現文型中級Ⅰ, Ⅱ, 国語表現など
E	上級前期	4			地域研究科院生	地域研究研究科	52	58.4-59.3	上級文法教本3,4など
F	上級後期	5	地域日本研究院生		48		知的創造のヒント, 現代作文講座Ⅰ, 日本語の文法(下)など		

めのコースで、4月から10月まで開講された。このコースは新たな試みとして漢字力の強化をはかり、また『にほんごのきそⅡ』のほかにも1コマは『日本語表現文型 中級Ⅰ』を使用した。この教科書はどの課からでも始められるようになっているので、比較的なじみやすい「存在・位置」の課をまず取り上げた。『にほんごのきそⅡ』は9月半ばに終えて、それからはスタッフ全員で『日本語表現文型 中級Ⅰ』を使用し、10月までに5課分を終了することができた。この試みは、教員研修プログラムのための日本語コースはBで終わりになるが、日本語をさらに続けたいという研修生が増えてきたため、課外補講のCコースにスムーズに移行できるようにということをねらったものである。実際、このBコースを修了した研修生のうち5名が10月からCコースに進級した。

教員研修プログラムのためのAコースは、新しく来た第4期生のためのコースで、10月から3月まで開講された。受講生は正規の教員研修生8名と聴講を許可された1名で、教科書は前年度と同じ『にほんごのきそⅠ』を使用した。

Cコースは1クラスの人数が多く、そのため個人差も大きくて、できる学生もできない学生も不満を訴えるようになってきた。そこで窮余の策として、11月からCコースの10コマのうち3コマを漢字系と非漢字系の2クラスに分けた。そして、この2クラスに分かれた時間に非漢字系クラスでは『日本語表現文型 中級Ⅰ』を復習した。

しかしこれよりひどいのはD～Fコースである。この3コースは本来大学院生のためのコースだが、課外補講のレベルが合わないという研究生がだんだん来るようになり、その数は正規生を上回るようになった。研究生は大学院の受験を目前にしているため、10月と2月の入学試験の前後には受講生が激減したり、1年のコースであるにもかかわらず10月に受講生が入れかわったりというような問題が深刻化してきた。例えばDコースでは、4月のスタート時にすでに40名でそのうち23名が研究生だったが、10月にはさらに29名もの研究生が加わり、大学院の正規生17名はますます受験の雰囲気にも圧倒されるようになった。

この年の10月に国際交流会館が完成し、そこに日本語コースのための研修室と日本語講師控室が設けられた。そこで、共同研究棟を使っていた教員研修プログラムの日本語と54年から第2学群、外国語センター、地域研究研究科と放浪の旅を続けてきたBコース、Cコースは58年10月から国際交流会館の研修室で授業を行うようになった。これで課外補講の教室確保のために毎学期あちこちの事務にかけあわなければならないという苦労は解消した。しかし、課外補講コースの所属する組織はあいかわらぬないので、テープや画用紙やコピーのための予算などはなかった。ただ、コピーは講師控室と同じ階にある国際交流

課で自分で自由にとれるようになり、以前のように逡巡しながら事務に頼んだり、事務の昼休みの時間を心配したりする必要はなくなった。

9、昭和59年度

59年4月12日に留学生教育センターが設立された。これに伴い、59年10月より東京地区を除く関東甲信越地区の国公私立大学に配置予定の大学院レベルの国費留学生に対する日本語予備教育を本学で実施することになった。日本語予備教育とは、専門教育に先立ち半年間日本語教育を集中的に行うもので、従来大阪外国語大学留学生別科で行ってきたが、この間にも研究計画等について指導教官の指導を得ることができるように専門教育を受ける大学に近い場所で日本語予備教育を行った方が教育効果の面からも効率的であるとの観点から、各地の主要大学で行うようになってきた。54年から名古屋大学、58年から北海道大学、そして59年から筑波大学で実施することになった。また、これまで課外補講として行ってきた日本語コースも外国人留学生等日本語研修コースとしてここで行うことになった。これまで所属する組織がなく、事務的にも財政的にも保証がなかった課外補講であるが、これでやっと落ち着く場所ができたわけである。

これまで新学期は留学生が増えても日本語担当者は増えず、前年度と同じ陣容で苦しいスタートを切らなければならないのが常であったが、59年は4月に非常勤講師が2名増え、専任4名と非常勤講師8名でスタートした。また、5月1日現在の留学生数は406名で、これで外国人留学生が日本人学生の5%を占めることになった。

(9) 59年度開設日本語科目

名称	レベル	コマ数	対 象	所 属	学 数	開講時期	教科書 / 教材
A	初 級	22	予 備 教 育 生	留 学 生 教 育 セ ン タ ー	19	59.10-60. 3	にほんごのきそⅠ, Ⅱ, 基礎日本語会話Ⅰ, Ⅱ
B2	初級後期	10	全 外 国 人 留 学 生		20	59. 4-59.10	にほんごのきそⅡ, 日本 語表現文型 中級Ⅰ
B	初級後期	10			23	59.10-60. 3	An Introduction to Modern Japanese
C	中級前期	10			43	59. 4-59.10	日本語表現文型 中級Ⅰ,
		10	37	59.10-60. 3	Intensive Course in Japanese Intermediate		
D	中級後期	10	研究生 / 大学院生	留 学 生 地 域 研 究 研 究 科	46	59 4-59.10	日本語表現文型 中級Ⅱ
		9			39	59.10-60. 3	国語表現
B1	初 級 2	8	教員研修4期生	教 育 研 究 科	10	59. 4-59.10	にほんごのきそⅡ
T	初 級 1	8	教員研修5期生		6	59.10-60. 3	にほんごのきそⅠ, 基礎日本語会話Ⅰ
E	上級前期	4	地域研究科院生	地 域 研 究 研 究 科	15	59 4-60. 3	An Introduction to the Structure of Japanese
F	上級後期	5	地域日本研究院生		20		日本人の生活空間, 文法 的に考える

9.1 日本語予備教育

日本語予備教育がいよいよ10月から始まることになった。本学で集中コースを実施するのは初めてのことであり、しかも6か月後にはかなりの日本語力を付けて専門教育を受ける大学へ送り出さなければならないということで、これまでとは異なる緊張感があった。10月17日の開講式には、学長と5名の副学長が列席して、日本語予備教育に対する筑波大学の意気込みを見せた。

日本語予備教育は便宜上Aコースと呼ぶことにした。第1期の予備教育生は20名で、そのうち国で2年間日本語を学習したという1名を除いた19名でAコースがスタートした。しかし、初級でしかも集中のコースで1クラス19名という人数は、予期されたこととはいえやはり致命的であった。苦肉の策として、12月1日から6コマだけ2クラスに分けて何とか乗り切った。上記の既習学生は最初週10コマのBコースで学習し、途中からAコースに加わった。

授業は週22コマで、そのうち20コマが日本語、2コマが日本事情である。1日5コマの日が週に2日あり、あとの3日は2限目(10:30~)から5限目(~16:55)までの4コマである。しかしこれだと午前中1コマで午後3コマとなり、最後の時間は能率の低下が著しい。このような時間割にせざるを得なかったのは、常磐線やバスの便という筑波の地

理的事情によるのだが、こんなことも言っていられなくなり、早々に1限目(9:00～)から4限目(～15:25)に変更した。

教科書は『にほんごのきそⅠ, Ⅱ』で文型を積み上げると同時に、『基礎日本語会話Ⅰ, Ⅱ』(筑波大学 留学生教育センター)によって運用力の強化をはかった。『基礎日本語会話Ⅰ, Ⅱ』は、過去4期にわたって教員研修プログラムの初級日本語コースを担当してきた佐久間が中心となって、本学の留学生の学習環境に合わせた状況設定による会話補助教材として初級コースの担当者たちが作成したものである。

9.2 教員研修プログラム日本語コース

教員研修プログラムの第1学期すなわち10月から3月までの日本語コースはこれまでAコースとしてA～Fの中に位置付けてきたが、59年10月からはTコースと呼ぶことにした。これは、10月から始まった日本語予備教育がAコースとして位置付けられたこと、半期ごとにA-B-A-Bと名称が入れかわり日本語プログラム全体の中での教員研修用日本語コースの位置付けが把握しにくいこと、Tの方が教員研修用という性格付けがはっきりすることなどの理由による。教科書は『にほんごのきそⅠ』のほかに、9月にできたばかりの『基礎日本語会話Ⅰ』を使用した。これは、広く本学の留学生の初級会話練習補助教材として使用できるが、もともとは教員研修生を対象に企画されたものである。

9.3 外国人留学生等日本語研修コース

前期は教員研修プログラムの日本語をB1としたので初中級のコースをB2と呼んだが、後期はこれをBとした。『にほんごのきそⅡ』終了後、『日本語表現文型 中級Ⅰ』の6課まで進んだ。そのほかに、今年度は“An Introduction to Modern Japanese”を聴解に使用した。Bコースの主な受講生は大阪外大終了生、理科系の大学院生、学群生であるが、後期のBコースには、最後の大阪外大終了生が在籍した。

Cコースは『日本語表現文型 中級Ⅰ』のほかに、“Intensive Course in Japanese Intermediate”(ランゲージサービス)を講読に使用した。Cコースの主な受講生は研究留学生であるが、実際には大学院の受験を目指している者がかなりを占めている。そのために、学生からは受験勉強的な授業をしてほしいという要望が強いが、まだまだ基礎固めをしなければならない時期である。

これまで留学生教育センターになかったDコースを今年度から5コマ開講し、このコー

スの学生はそのほかに担当者の許可を得れば、地域研究研究科の5コマを聴講してもよいことになった。留学生教育センターのDコースの主な受講者は大学院の受験を目前にひかえている研究生で、そのうちのかなりの者が地域研究研究科の日本研究コースを受験する。ここの日本語の受験科目には擬古文があるため、Dコースでは1コマを擬古文にあてた。これはまさに限られた学生の大学院受験に照準を合わせた授業であるため、全外国人留学生を対象とした留学生教育センターの日本語という視点から見ると問題が無くはないが、一方擬古文を必要とする学生が20名位いるという現実もあるのである。

9.4 地域研究研究科日本語科目

便宜上Dと名付けた地域研究研究科の中級日本語コースは従来研究生の受講生が多く、もともとの受講生であるはずの大学院生が研究生に圧倒されかねない状態がずっと続いてきた。そこで、今年度から留学生教育センターにもDコースを開講したのであるが、これが5コマしかないため、ほとんどの学生が地域研究研究科のDも受講し、結局同じ状態が続いている。留学生教育センターのDコースが5コマしかないので仕方がないことなのかもしれないが、人数の大幅な増加や学期の途中での出入りの激しさなど、正規生にとっては迷惑な話である。

一方、地域研究研究科の上級の日本語コースの受講者は大学院生だけになった。これは、研究生は留学生教育センターで日本語教育を受けるのを原則とするということをおrientationで確認した成果であろう。教材は主に担当者が作ったものを使ったが、Fの講読では『日本人の生活空間』と『文法的に考える』（北原保雄）を使用した。

10. 昭和60年度

60年5月1日現在の留学生数は507名で、1年前より約100名増えており、10月1日にはさらに約90名増加の595名になっている。4月1日に大坪一夫と野田尚史が赴任して、日本語担当の専任教官は6名になり、非常勤講師は13名になった。しかし、同じこの年の4月に日本語・日本文化学類が開設されて、44名の学類生が入学し、専任教官は留学生教育センター、日本語・日本文化学類、修士課程の地域研究研究科、博士課程の文芸言語研究科の4つの教育組織で授業を担当しなければならなくなった。さらにそれに伴って、学生指導、論文指導、入学試験業務、各種委員会委員、各組織の会議、各組織で催される行事への参加など、各教官の負担はますます増加し、複雑化した。日本語・日本文化学類は、

4月13日の第一次入学試験を皮切りに、第二次入学試験、入学式、オリエンテーションと続き、一方、留学生教育センターでは15日に、研究科では9日にそれぞれ授業が始まり、すべてが同時進行で、今までにないあわただしい新学期であった。

10月には日本語担当教官全員でプレースメントテストを新たに作成した。これは、聴解、文字、語い、文法、読解の5領域から成り、出題の範囲を『基礎日本語会話Ⅰ、Ⅱ』、『Grammatical Notes in English Ⅰ、Ⅱ』、『Basic Japanese-A Review Text』、『日本語表現文型 中級Ⅰ、Ⅱ』にしぼって、各領域で問題を一本化したものである。10月14日に第1回のテストを実施し、この結果によってコース分けをした。この後指定されたコースが自分の能力に合わないと思う学生は、2週間の間だけ他のコースに移動することができる。コースが決まったら学生は科目登録票を提出しなければならない。これは、学期の途中で学生が出たり入ったりして受講生がいつまでも確定しないということ为了避免するために、この年の後期に初めて採用した方法である。

(0) 60年度前期開設日本語科目 (604・60.10)

名称	レベル	コマ数	対 象	所 属	学生数	教科書 / 教材
A1	初 級	22	予 備 教 育 生	留 学 生 教 育 セ ン タ ー	5	基礎日本語会話Ⅰ、Ⅱ, Basic Japanese-A Review Text, 日本語表現文型 中級Ⅰ
A2					5	
B	初級後期	7	教員研修5期生/研究生		13	にほんごのきそⅡ, 基礎日本語会話Ⅱ
C	初中級	7	全 外 国 人 留 学 生		43	Basic Japanese-A Review Text
D	中級Ⅰ	7			56	日本語表現文型 中級Ⅰ
E	中級Ⅱ	7			37	日本語表現文型 中級Ⅱ
F	中級Ⅲ	4		大学院生 / 研究生	24	An Introduction to the Structure of Japanese Ⅰ
	上 級	5	大 学 院 生	地城研究研究科	24	読むことからの出発

(11) 60年度後期開設日本語科目 (60.10-61.3)

名称	レベル	コマ数	対 象	学生数	教 科 書 / 教 材
A1	初 級	23	予 備 教 育 生	7	基礎日本語会話Ⅰ,Ⅱ, Basic Japanese -A Review Text, 日本語表現文型 中級Ⅰ
A2				9	
A3				6	
B	初 級	7	教員研修6期生/研究生	15	An Introduction to Modern Japanese
C	初 中 級	7	全 外 国 人 留 学 生	20	日本語表現文型 中級Ⅰ, よく使われる新聞の漢字と熟語 日本語表現文型 中級Ⅱ
D	中 級 Ⅰ	7		45	
E	中 級 Ⅱ	7		54	
F	中 級 Ⅲ	4		大学院生/研究生	
	上 級	5	大 学 院 生	24	

10.1 日本語予備教育

60年度前期の日本語予備教育生は11名で、そのうち1人は中級コースに入り、Aコースは10名で始まった。10名の中には2か月から4年前に1年までの既習者が5名おり、この5名をA1クラスとして、未習の5名をA2クラスとした。この2つのクラスに5月からインドネシア政府派遣の留学生6名が加わった。後期の日本語予備教育生は26名で、10月に2クラスで始まった。11月に遅れた学生が到着し、この学生のためにA3クラスを開いた。その後12月に試験をしてその結果で、7名をA1クラス、9名をA2クラス、6名をA3クラスとしてAコースを再編成し、よくできる学生は中級コースに移った。

授業は20コマが日本語で、そのほかに科学用語を中心とした授業を前期は2コマ、後期は3コマ行った。教科書は『基礎日本語会話Ⅰ,Ⅱ』で、そのほかにそこから抜き出した文型の練習のための教材とテープを担当者が作成して使用した。さらに自習用として、“Grammatical Notes in English”と単語表を作成した。前期はこれらを6月に終了して、7月の初めに“Basic Japanese-A Review Text”で復習をした。9月は『日本語表現文型中級Ⅰ』を使用した。後期も使用教材は大体同じだが、一番上のA1クラスでは『日本語表現文型 中級Ⅱ』まで進んだ。科学用語のクラスは椎井博美留学生教育センター長（構造工学系）と物理学系の田上由起子講師が担当し、教科書は担当者の作成した『科学日本語』（筑波大学 留学生教育センター）を使用した。

10.2 教員研修プログラム日本語コース

60年度は教員研修生を対象としたコースを開講はするが、受講生は限定しないことにした。これは、初級を必要とする研究生がいるにもかかわらずほかにコースがないということと、この年は教員研修生で中級レベルの学生がいて初級の受講生が比較的少なかったことによる。

60年度前期のBは第5期生の2学期目として開講され、教員研修生は6名であるが、ブレースメントテストの結果、7名の研究生もここに加わった。教科書は『にほんごのきそⅡ』と、59年12月に作成された『基礎日本語会話Ⅱ』（筑波大学 留学生教育センター）を使用した。

60年度後期の教員研修生を対象とした日本語コースは、全くの初級であるがコース名はBである。59年度の後期は名称をTコースとして教員研修プログラムのための日本語コースという性格付けをはっきりさせたが、60年度はTをやめてBとした。これは前年度とは逆にこのコースを教員研修生だけに限らないということにしたためである。教員研修6期生8名が主な受講生であるが、そのほかに比較文化学類受け入れの学生が加わった。教科書は新しく“An Introduction to Modern Japanese” (Mizutani, O & N)を使用した。

10.3 外国人留学生等日本語研修コース

57年度から10コマずつ開講してきた全学の研究生と大学院生のためのコースを60年度は7コマにせざるを得なくなってしまった。

後期のC, D, Eは7コマで1コースという形をとらず、科目制にした。Cは、聴解、会話、読解A, 読解B, 作文、文型、漢字の7科目、Dは、会話、読解、作文、文型(3コマ)、漢字の5科目、Eは聴解、会話、読解、作文、文型Ⅱ、文型Ⅲ、擬古文の7科目を開講した。CとDは、各学生の各技能のレベルによってどちらのコースの授業をとってもよいという縦割り方式にした。例えば、読み、書き、文法の力はあるが話す力が劣るといふ学生は、Dの会話を除いた4科目に登録して会話だけCに登録するというようなことができるわけである。

学生は受講するすべての科目について登録票を提出しなければならない。この登録制によって学期の途中から学生が勝手に授業に出てくるということは防ぐことができたが、入学試験が近付くと出席者が減るといふ現象はあいかわらずであった。ただ、この途中で受講生が減るといふ現象は入試のためばかりではなく、1クラスの人数が多すぎるというこ

とも関係しているのではないかと考えられる。いずれにしても、40人も50人もいるクラスでは、日本語についての講義はできても日本語の授業はもはや不可能である。これは早急に解決しなければならない問題である。

10.4 地域研究研究科日本語科目

地域研究研究科の中級レベルの日本語は、前年度までは総合的な授業形態を取っていたが、今年度からは上級に合わせて会話、読解、作文、文法というような科目に分けて開講した。これらの科目の受講生は半分以上が研究生である。留学生教育センターのC～Eのコマ数が減ったことや、1クラスの学生数が異常に多いことなどを考えると、かなりの研究生が地域研究研究科の授業に流れてくるのは避けられないことであろう。しかし、4月から授業が始まってクラスの雰囲気でもき力もだんだん積み上がってきているところへ10月になって急に学生が増えてまた一からやり直しという図式は何とか解決しなければならない。

何とめまぐるしい10年であったことだろう。上に述べてきたように、絶えず新しい事態が生じ、半年ごとに何らかの変更を余儀なくされ、また学期の途中でさえ苦肉の策を講じることも何度かあった。そのたびに教授から助手までが、経済的な工面から教室の確保にまで奔走し、まさに応急処置に次ぐ応急処置でどうにか乗り切ってきたという感である。

各コースの目標の設定、各コースの概要の明確化、各コースのカリキュラムの整備などによる日本語プログラム全体の整備、プレースメントテストの整備と適切な学生の配置、1クラスの人数を減らす、学期途中のクラスへの出入りを防ぐ、などは、早急に取り組まなければならない問題である。一人一人の教師が1コマ1コマの授業にどんなに全力投球しても、悪条件のもとではせっかくの努力も十分に生かされないのである。外国人留学生数が日本人学生の6%を越えた現在、日本語に対する外からの要求にその都度対処していくのではなく、日本語の側で主体的に日本語教育の枠組みを作り上げる時が来ているといえよう。

筑波大学では54年から大学院で日本語教師および日本語教育研究者の養成も行っている。これはちょうど7年を過ぎたところである。また59年には日本語・日本文化学類が設立された。教師養成には授業見学や教育実習が欠かせないものであり、これを本学の日本語教育の中でどのように位置付けるかということも大きな課題の一つである。なお、本稿では

教師養成については触れることができなかったが、これもいずれ報告される機会があろう。

注

- (1) これは54年に開かれる「第5回筑波国際シンポジウム」のための準備セミナーとして開かれたものである。テーマは「国際化過程における日本文化」で、その分科会の一つとして「日本語」分科会があった。ここでは、日本語による表現の特性や東南アジアにおける日本語教育の現状などから、日本語による表現は、国際化にあたりどのような問題があるかを討議した。『国際化過程における日本語教育』にその報告がある。
- (2) 「第5回筑波国際シンポジウム」は54年10月に「国際化過程における日本文化」の統一テーマで開催された。「日本語を学ぶ、日本語を教える」の分科会では27名の報告や発表があり、それらは『日本人と国際化』（筑波国際シンポジウム実行委員会）にまとめられている。
- (3) 50年から54年については、寺村秀夫「筑波大学の日本語教育の概況と今後の計画について」（『外国人と日本語』5, 1979）に詳しい報告がある。
- (4) 教員研修プログラムの55年10月から59年3月までの日本語教育については、佐久間まゆみ、他「初級日本語教育の経過報告」（『教員研修留学生プログラム報告』, 1984）にいろいろなエピソードと共に詳しい報告がある。
- (5) 「日本語表現文型 中級Ⅰ, Ⅱ」については、『日本語教育』60号に佐久間まゆみ「『日本語表現文型』の諸問題」が掲載される予定である。

参考文献

1. 筑波大学十年史編集委員会編 『筑波大学その十年』, 1983
2. 筑波大学留学生委員会編 『教員研修留学生プログラム報告 1980年10月～1984年3月』, 1984
3. 筑波フォーラム編集委員会編 『筑波フォーラム』No18, 1982
4. 寺村秀夫, 他「筑波大学の日本語教育の概況と今後の計画について」『外国人と日本語』5, 1979